

◇編集後記◇

読者の皆様、『とい』28号をお届けします。ささやかですが、エッセイ、詩、小説のラインアップとなりました◆和田は、マクロな視点から、日本の教育が置かれている状況を、あざやかに解き明かす。学校を生徒（学生）と教師の手に取り戻すためには、現場への無謀な介入を、これ以上許してはならない◆歓喜の詩を詠いたいと願いながら、挫折の日々を詠う楠瀬は、どこへ向かうのか。緑濃き桜木の、どこからともなく聞こえてくる、すずやかで、のびやかな、さえずりに心を奪われたのは、梅雨の晴れ間のことであった◆松崎の語りは第七章に至り、序破急として読み手を楽しませる。読み手は、語り手とともに言葉を探し、世界を紡ぐ時を楽しむことになる◆問いを発する力の弱体化が見られる現代にあって、ともすれば、私たちは日常に埋没し、目先のことにとらわれ、右往左往する傾向があるが、言葉をもって問い続けることを忘れてはなるまい◇なお、2008年1月『哲学の歴史 第3巻』（中央公論新社）への寄稿に続き、松崎一平著『アウグスティヌス「告白」〈わたし〉を語ること…』（岩波書店）が2009年1月に出版されたことをご報告します。<<>